

飛躍する台湾産業



台湾繊維産業は化学繊維や機能性繊維中心へとシフト

繊維産業は、戦後から1980年の半ば頃まで台湾産業の重要な担い手として、輸出額の最も大きい産業であった。しかし、労働集約型産業のため、世界における貿易自由化や開発途上国の台頭、労働コスト上昇といったさまざまな課題により、徐々に衰退していった。現在では、これまでの綿製品を中心とした輸出から、化学繊維や機能性繊維の研究開発・製造・輸出へと産業全体が変化しており、差別化可能な高付加価値の機能性繊維など革新的な商品を生み出している。本稿では、現在の台湾繊維産業の規模、および化学繊維と機能性繊維の主力メーカーや製品を紹介し、今後の動向を探る。

伸びるハイテク繊維、衣料は衰退

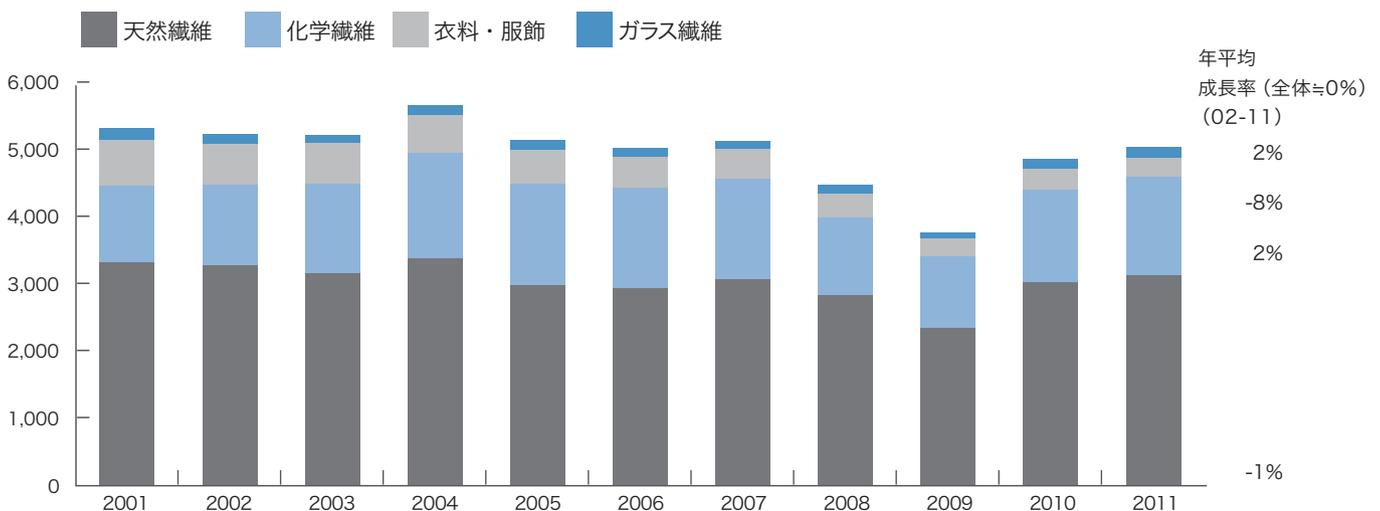
繊維産業は現在、大きく分けて天然繊維製造、化学繊維製造、衣料・服飾製造、ガラス繊維製造に分類できる。經濟部統計処の生産額統計によると、2001～2011年の過去10年間、産業全体ではほぼゼロ成長(2011年度生産額：5,008億元、2001年比5.3%減)となっているが、製品別で異なる動きをみせていることがわかる。天然繊維(生産額前年比-2%)が依然として最大の割合を占めているが、衣料・服飾(生産額前年比-8%)は貿易自由化や労働者不足などで大幅に衰退し、生産拠点の海外移転による空洞化が深刻な問題となっている。

その一方、化学繊維は2001年から徐々に成長軌道に乗り、その生産額は繊維産業全体の21%から30%を占めるまでになった。政策や産業を取り巻く環境の変化を受け、台湾の繊維メーカーは、市場価値の向上と独自性を求め、高度な技術を必要とする化学繊維や機能性繊維の生地といった素材の製造へと変化していると言える。

化学繊維、強みはナイロン66

レーヨン、アクリル、ポリエステル、ナイロンといった主な化学繊維のうち、台湾はナイロンの分野で世界でも高い競争力を保ち、生産量は米国と中国に次ぐ第3位である。ナイロ

図1：2001～2011年の繊維産業生産額統計(単位：億元)



出所) 經濟部統計処データよりNRI作成



ン素材の中で主力となっているのが、ナイロン6、ナイロン66である。技術的に比較的難度の高いナイロン66系は、融点一般のナイロンより高い、弾力性が高い、吸水率が低い、成型加工が簡単、といった特徴を持つことから、伸縮性の高いスポーツウェアやレオタード、靴下などに用いられる。また、米国のナイロン素材の多くが毛布などの製品に使われるが、台湾のものはほとんど衣料向けという特徴がある。さらに、中国大陸のメーカーはナイロン66系のコア技術を持たないため、台湾メーカーがナイロン66を利用した衣料製造に一定の役割を果たしている。

三洋紡織繊維(TRI、オーシャン・テキスタイル)は台湾企業でも数少ないナイロン66系のコア技術を持つメーカーである。1999年に裕隆繊維を買収し、ナイロン業界における垂直統合を果たしたのち、2007年にはタイにナイロン66系の研究開発・製造を手掛ける裕隆繊維工場を設置。台湾メーカーとして初めて海外でナイロン66系事業の展開に着手した。2008年の北京オリンピック開催を受けたスポーツアパレルブームでは、ナイロン66系の需要が急激に高まり、供給が逼迫する程であった。

難局打開の鍵は機能性繊維

機能性繊維の生地も、台湾メーカーにとって難局打開につながる重要な武器の一つだ。生地のOEM(委託元ブランド名による製造)/ODM(委託元ブランド名による設計・製造)を手掛ける大手サプライヤーである綿春繊維工業は、年間売上高28億元のうち97%が米NBAチームや仏サッカーナショナルチームのユニホームなど、世界のスポーツブランド向けとなっている。同社は独自に生地をデザインする技術を持ち、ブランド各社のニーズに合わせた新製品を開発することができる。専門性の高い研究・開発技術を通じ、年間約3,000種の生地をデザインするとともに、同社のデータベースには各社のニーズやブランドイメージに合わせた提

案を目指す新たな生地(夜光タイプの生地等)をストックし、世界的ブランドとの提携チャンス拡大を図っている。

また、エコロジー意識が高まる中、多くのメーカーがこれを生地開発の重要なコンセプトと位置付けている。機能性繊維の研究・開発を手掛ける興実業(シングテックス・インダストリアル)は2008年、コーヒーの出し殻を再利用した機能性繊維を開発し、関連特許を取得した。速乾性や紫外線カット機能といった特徴を備える他、臭いの元となる物質を分解する効果もある。同年末には仏アウトドアブランドのEiDERと吸汗拡散の機能性ウェアを発表、製品コンセプトが市場に広く受け入れられた。さらにペットボトルを再利用した生地を開発するとともに、ペットボトルから紡いだ糸とコーヒーの出し殻を組み合わせ、エコ、健康といった理念を更に推し進めている。

今後の動向

台湾の繊維メーカー各社は、経営がますます難しくなる中、イノベーション/研究開発主導型にモデルチェンジを図り、より高い付加価値の創出を目指している。これまでも世界大手各社と異業種間で協力してきたが、今後も世界大手のマーケティング力と台湾メーカーの技術を活かして、アジア市場でより多くの顧客ニーズを満たしていくことができるだろう。台湾の繊維産業は、今後も技術面でのイノベティブな研究を重ね、世界市場のニーズに応えることができれば、独自の地位を築くことも期待できる。

(施佳余 : c-shih@nri.co.jp)